

礼拝

令和5年8月28日
3号



親切にして相互協同

盂蘭盆経の教え～やさしい人になってほしい

夏休みが始まりました。二学期の前半には文化祭や合唱祭、舞台部門発表会など、たくさん行事が次々と行われます。一所懸命にならばなるほど、考え方が違ったり意見がぶつかったりすることが出てくると思います。しかし、一つの目標に向かうなかまとして、親切にして相互協同の気持ちを持てるように心がけてほしいです。

夏休みの行事の間に「お盆」という期間があります。お釈迦さまの教えを記したお経の一つである「盂蘭盆経（うらぼんきょう）」

にその由来を見ることができません。インドの古い言葉で「逆さ吊り」を意味するウラバナが音写されて盂蘭盆（うらぼん）になり、それが略されて「お盆」になったという説があります。お盆といえはわたしの命をつないで下さったご先祖さまをお迎えして、お供物をささげ、ご先祖さまに感謝をする時期であるはずなのですが、逆さ吊りとはどういうことなのでしょう。

お釈迦さまのお弟子の一人である目連尊者（もくれんそんじや）は神通力第一と称される能力の持ち主で、その力は人々のために活かされ多くの人々から尊敬されていきました。ある日、目連の前を母子が楽しそうに通りました。その姿を見て、何年も前に亡くなった母親を思い出した目連は、神通力を使って母の姿を探すことにしました。目連にとってはとても優しい母親であったので、きっと素晴らしい世界に転生していることだろうと思ひ、天上界から人間界、修羅の世界などを探したのですが一向に見つかりません。まさかという気持ちで地獄道、餓鬼道とたずねてようやく見つけることができた母親は、餓鬼（がき）の姿となって逆さ吊りにされるほどの苦しみを受けていたのです。目連は神通力を使って、飢えと渇きに苦しむ母親を救おうと、食事や飲み物を送りますが、それらは母親の目の前で全て燃え尽きて灰になり、さらに母親を苦しめてしまうのでした。では、なぜ目連の母親はこのような姿にな

ったのでしょうか。

夏のある日、目連の家の前を通りかかった旅人が一杯の水をめぐんでくださったと母親に頼みました。水瓶にはあふれるほどの水が入っていました。母親はふたを取ろうともしませんでした。何度もお願ひする旅人に対して「この水は目連のための水だから、あなたにあげる水はない」と答えたのです。つまり母親は、慳貪（けんどん）けちで欲が深く、思いやりがなく、冷たいこと）の罪を犯していたのです。

目連はすぐにお釈迦さまのもとへ相談に行きました。するとお釈迦さまは「過去の事実を変えることはできないが、母親ができるようになった布施（ふせ）を自分が持っているものをあげることをあなたがしなさい。」と話されました。そこ目連は、多くの人のために食事や寝床を与え、大切にもてなしました。すると、もてなしを受けた人々の喜びが餓鬼道にまで伝わり、そこには白い雲に包まれた母親が幸せそうに天上界に登っていく姿があったそうです。お釈迦さまは「自分の力を母親だけのために使うのではなく、母親と同じように飢えに苦しむ人々を救うために使いなさい」と目連を諭したということです。

盂蘭盆経は、自己中心的な行動への戒めを説くとともに、ご先祖さまや縁のある人々のおかげを自覚すること、また、自分だけのためになく困っている人に対する助け合いの気持ちを持つことの大切さを説いているのです。